日本鳥学会
鳥学ニュース No.54
1995年2月1日

シロウトの目から見た日本鳥学会

中村　和雄

「学会の活性化について、山岸会長の発言を受ける形で意見を書け。」という依頼を受け、軽い気持ちでお引き受けしたが、いざ書く段になってこれは大変なものを引き受けてしまったと気がついた。先ずは、山岸会長の発言をもう一度読み直してみる。

「学会」とは、「科学する者と科学しようとする者の会」であり、「研究の成果を科学雑誌に科学論文として発表・公表する者」が「科学する者」であるという会長の定義は、ちょっと極端過ぎる嫌いもあるが、基本的には私も賛成である。極端過ぎると感じる理由は、「科学する者」でなくても、最近の情報を得るだけの目的で、学会に所属する者はあってもいいと思うからである。しかし、本来の「学会」の姿は、お互いの成果を批判し合いながら、学問を発展させて行くことであろうから、こういった方向へ今後進んでいくとしたら、情報を得るだけの目的の会員の居場所も考える必要があろう。(例えば、多くの学会では、英文誌と和文誌とを発行し、それぞれを購読できるようになっているし、「ニュース」をもっと充実させて、「ニュース」だけを購読する会員制度も考えられるかも知れない。)

私は、元々、昆虫をやっていたことになっているが、私が長年つき合っていたのは、実はクモである。確かに、昆虫ともつき合いはあったが、そこでは個体群生態学的な興味と後年は性フェロモンを対象にした化学生態学的な分野であった。その後、研究所の都合で現在の地位につき、鳥を対象にした研究を行っている。全くのシロウトが、鳥の研究を行っているのである。しかしそうかといって、私はクモの専門家とも、昆虫の専門家とも思っていない。鳥と同様、クモのことも昆虫のことも、全く知らないからである。私は、捕食者のモデルとしてクモを選び、情報源への定位行動の解析のためにフェロモンを放出するガを扱っていたのである。

そういった者の目から見ると、鳥学会はいささか奇異に写る。まず、自分の研究対象は特定の鳥であったり、林や海の鳥であったりして、その範囲を固守する者が多い。研究対象が鳥に向けられる「鳥学会」である以上当然のことかも知れないが、このままでは生態学的な、あるいは生理学的な解析のための材料として鳥を用いている研究者は、参加しにくいであろう。

また、山岸会長も言っているように、大会や雑誌に投稿される論文は、鳥のBiologyと行動学が大部分である。そして、そこで用いられている道具は、基本的には双眼鏡だけある。目ざましく発展している現代技術をもっと積極的に取り組んでいく大胆さがあってよいであろう。鳥に転向するに際して私が予期していたことは、鳥を扱っている生態学者たちは個体数の推定や行動範囲の推定などに、数学的手法をふんだんに駆使しているのだろうということであった。それまで、昆虫を扱いながら私が垣間見ていた鳥の生態学はそうであったし、今でも例えばBiometrics誌には、毎号の

ようにCapture - recapture Methodのためのモデル（多くの場合、対象は鳥を含む）を扱った論文が載っているからである。しかし、そういった取り扱いは皆無に等しい現状に、拍子抜けした。得られた結果を一般化し、より多くの情報を引き出すために、統計学的な手法とともに数学的な取り扱いがもっと広く行われる必要があろう。

手法もさることながら、一部の分野にかたよっている鳥学会の現状は、本学会が鳥学を扱うものであり、またそれを目指すのなら、これは確かに正常ではない。少し古くなるが、私はニュージーランドで開かれたIOCに出席して、日本の鳥学会で論じられている分野がIOCがカバーするもののほんの一部に過ぎないことを知った。しかし、これはそれほど驚くことはない。昆虫学会の場合でも、その比率は違うものの同じようなことはあるのだから。それよりも驚いたことは、参加している多くの日本人が、日本の鳥学会では一度もお目にかかったことのない人たちであったことである。その中の多くの人は、鳥学会の会員でもないのである。これはまた、異常なことであろう。

鳥学会が真に鳥学の発展を目指すものであるのなら、これらの研究者たちも参加することがどうしても必要であろう。しかし、それはそれほど簡単ではない。問題は、自分と違う分野にも興味を示し、他人の成果にも真剣に批評し合える真に「研究者の集まり」になることができるかどうかにかかっているであろう。私が、かつてフェロモン源に対する昆虫の定位の機構に取り組んでいたとき、多くの他分野の研究者たちとの議論がどうしても必要であった。昆虫の生理学、特に感覚生理学、生化学、微気象学、また手法としてコンピュータを用いたシミュレーションなどの。そして、それらを自分の研究に取り込むためには単に知識を借りてくるだけでは十分ではなく、それらの分野の基本をじっくりと勉強し、彼らと対等に議論できる必要があった。

鳥学会が鳥を扱う研究者の集まりになるための具体的な方法として、様々の分野の話題をテーマとしたシンポジウムを開き、その内容は鳥学会誌に掲載していくことはどうであろうか。シンポジウムは大会の時でもよいし、それ以外の時に開いてもよい。要は、少しでも「研究者の集まり」を目指して行くことである。そういう意味で、今年開かれる早稲田大学での大会には、期待するところが大きい。

（農業研究センター・鳥害研究室）

関連学術会議

1995

3月27～	30日	特別シンポジウム：北極環境の生態学（アバディーン・イギリス）
4月 3～	5日	第39回生態遺伝学グループ年会議（ニューキャスル・イギリス）
4月 7～	9日	イギリス鳥学会と自然保護合同委員会の合同会議「帰化鳥類」(ピーターバラ: 本号)
7月31～8月3	日	アメリカ生態学会第80回年会議（スノバード・ユタ州）
8月10～	17日	第24回国際行動学会議（ホノルル：no.53）
8月20～	25日	第7回ヨーロッパ生態学会議：生態プロセス－現状と展望（ブダペスト）
8月27～	30日	第42回日本生態学会大会（岩手大）
9月 4～	8日	第5回ヨーロッパ進化生物学会議（エディンバラ）
9月15～	17日	日本動物学会第66回大会（東京都立大）
9月 1～	3日	日本鳥学会1995年度大会（早稲田大：別紙参照）
12月 6～	7日	シンポジウム：島嶼における進化（ロンドン）

1996

6月30～7月4	日	第13回動物の繁殖に関する国際会議（シドニー）
12月 1～	8日	第9回パンアフリカ鳥学会議（アクラ・ガーナ）

1998

8月		第22回国際鳥学会議（ダーバン・南アフリカ）

関連分野の学会大会・シンポジウムに関する情報をお知らせください（〆切：2ヶ月前）

1994年度鳥学会上越大会印象記

増えてきたきれいな図表

加藤 明子

新潟での大会ということでもっと涼しいかと思っていたが、意外と暑かった。A会場とポスター会場が特に暑かったのは人々の熱気のためだったのだろうか？感想を書くようにとのことが、実を言うと自分の発表が済むまではどうも落ちつかず、終わった後には気が抜けてしまい、あまり人の話も聞いていない。つまり決して熱心な参加者ではなかった。他にもあと2人、感想を書くということなので、学会に対するまじめな（？）コメントはそちらの方に任せて私は個人的な感想を書かせていただこうと思う。

いつものことだが発表の準備が前日の夜中までかかり、スライドにする間がなくOHPを使った。全体的にスライドの方が多数派だったような気がするが、両方使っている人も多かった。鳥の美しい写真などはスライドでしか見せることができないがOHPは作るのが手軽で図表に後から書き込むことができるという利点があるので、図表で説明、写真はスライドと使い分けるのはいいと思う。鳥の写真をバックにOHPで説明している人がいたがこれはなかなかいいと思った。カラープリンターが普及してきたらしく、スライド、OHP、ポスターのすべてがカラフルになってきた。内容が重要なのは言うまでもないが、図表も見やすくきれいなほうが見る方も楽しい。

鳥学会に参加するのは今年で4回目。知り合いの人も少しずつ増えてきた。1年に1度学会でしか顔を合わせることがないような人も少なくない。初めての時には話す人も少なく身の置き場のなさを感じたが、こうなると懇親会も楽しい。人と話すのに一生懸命で料理はあまりいただけなかったが、会場の隅でやっていた利き酒コーナーはさすが新潟、日本酒の本場だった。地方での学会はこういう楽しみがあってうれしい。来年は東京会場になるようなのでつまらないという気もするが、反面便利ではある。上越教育大は交通の便があまりよくなかったが臨時バスを用意してくれるなどの配慮はうれしかった。学会準備に携わったみなさま、ごくろうさまでした。

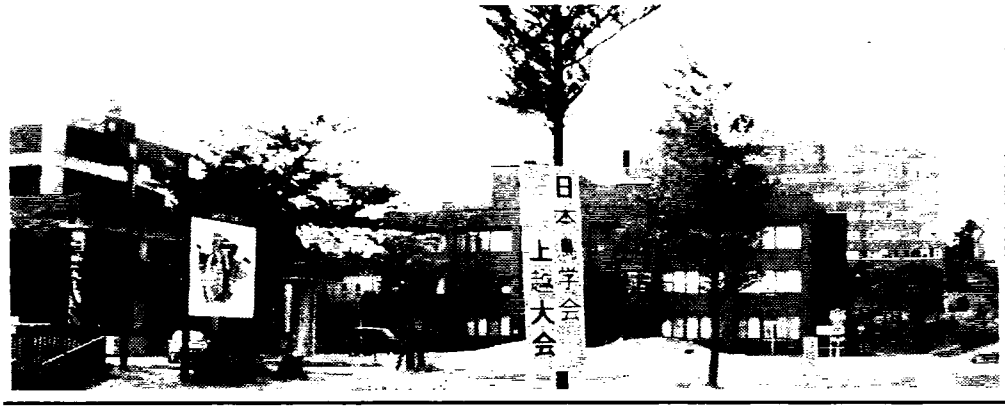
（国立極地研究所）

学会の発展とプログラム編成

呉地 正行

1994年10月8～10日に、上越教育大学で行われた鳥学会大会に参加して感じたことをいくつか述べてみたい。

まず感じたのは、今回も含め大会が年々活性化し、多様化してきたことだろう。特に今回は英語での一般講演もあり、鳥学会も少しずつ国際化してきたと感じた。鳥類研究者にとって、大会に参加する一番のメリットは多くの研究者の研究成果を知ることができ、また同一のテーマを研究している者同士で、情報交換することができることだろう。鳥学会が国際化することはその視野を広げるという



会場となった上越教育大学

点で好ましいと思う。私も今回、英国でコクガンの研究を行っている英国人研究者に会い、お互いに多くの情報を得ることができ、共同調査の話までまとまってしまった。これも"国際化"の恩恵だろう。このようなことは、国際学会ではよくあるが、国内の学会でも今後は"国際的"な要素がもっと増えるとよいと思う。

大会のシステムについても一つ気づいたことがある。今回の大会の特徴の一つは、一般講演が初めて3会場で同時に行われたことだろう。これは従来の2会場方式では処理できないほどの数の演題の申し込みがあったことが背景にあり、それは学会がより発展つつあることを示すものだと思う。プログラム編成にも主催者の苦労のあとが見えるが、私自身を含め聞きたい講演が同じ時間に重なり、とまどった人も多かったようだ。聞きたい講演はすべて聞きたいというのが参加するの者の本音だと思う。また会場数が増えるに従いプログラム編成が難しくなるのも事実だろう。次回から講演の申し込み者に、その講演をどのようなジャンルで発表したいかを書いてもらい、それに基いてプログラム編成をしたらどうだろう。ジャンルの分類については学会の事務局で検討して決めるのがよいと思う。

（日本雁を保護する会）

大切な院生間の交流と刺激

高木 昌興

学部の3年で初参加して以来、今大会で5年連続参加になった。学部時代には大会の雰囲気になじむのが精一杯で冷静に大会の状況を判断することはできなかったが、この数年間の鳥学会大会は上昇気運にあるように感じられる。それは一般講演、ポスター発表の数の多さに加えて、シンポジウム、特別講演、自由集会など大会の内容の豊富さにそれが現れている。以下に個人的な感想を述べてみたい。

昨年のMøller博士に続いて、今年の特別講演でも超有名学者Woolfenden博士の話を聞くことができたことを幸運に思う。講演は個体群生態学、行動生態学、遺伝学などの様々なエッセンスがちりばめられてとても興味深かった。研究に適した材料を選択するのは研究者の洞察力であるにしても、研究対象の善し悪しが研究者をも育てる、という感想を持った。言うまでもないが、長期的に調査地が確保され、個体識別、観察が容易であることは、研究を進めるうえの極めて重要な要素であることを再認識させられた。

一般講演は基礎的なものから応用的なものに渡り、内容は盛り沢山であった。生態学分野の発表が圧倒的に多かったものの、生理学的研究や分子生物学を応用した研究も幾つか見られ、鳥学会大会もより一層多様化する傾向が認められるように思う。データ収集が難しい大型鳥類の研究では、最新機器の導入や共同研究によってマクロな視点から重要な知見が集積しつつあり、中小型鳥類の研究はより精密な観察や実験によって生物学的に重要な事柄が明らかにされてきている印象を受けた。発表者は常連に加え新人も多く、外国人の留学生や研究員が発表を行なっていたのは新鮮でよい刺激になった。

また、今大会では参加する学生、院生の数が多く、ざっと数えても20人程が多岐に渡った研究テーマで発表していたことも印象的だ

った。諸先輩方によると鳥の研究をしている学生、院生の数の多少には波があり、私達の世代は人数が多い世代になるらしい。これより上の世代では現在30歳半ばから40歳前半にかけた年代に比較的多くの研究者が集まっている。これらの人達は互いに批評をしあい、議論を深めていったという。つまり、私達の世代も互いに刺激しあえる良い環境にあることを認識して、院生間の交流を積極的にすべきであると思った。また、それと同時に全国各地の大学に研究中心の生活をしている仲間がいるのを知って良い励みになった。

（北海道大・農）

津戸基金シンポジウム「ツルの現状と保護・研究への展望」の報告

古賀 公也

1994年11月26日（土）午前10時から午後4時30分まで、環境庁東北海道地区国立公園・野生生物事務所で津戸基金シンポジウム「ツルの現状と保護・研究への展望」が開かれました。約50名の参加があり、熱気のこもった会合になりました。

午前中は藤巻裕蔵氏（帯広畜産大）を座長に迎え、まず正富宏之氏（専修大北海道短大）に「タンチョウ研究の流れ」を講演していただきました。この講演では、タンチョウが再発見された1926年以降文献が増加し、1970年から生態に関する詳細な報告が見られるようになったことや、本種の保護には生息環境の定量的解析が急務であることが指摘されました。次に、志村良治氏（釧路市動物園）が「釧路市動物園で保護収容されたタンチョウについて」の題で、収容個体の死因や治療、動物園で行っている人工増殖等について発表しました。続いて、松尾武芳氏（タンチョウ保護調査連合）は「1989年の風蓮湖におけるタンチョウの分布」について講演し、定着した38番いのうち、雛を飛翔できるまで育てたのはわずか13％であったことを明らかにしました。午前中最後の講演では佐羽尾加奈・富山奈美（帯広畜産大学）の両氏が「十勝地方において繁殖するタンチョウの利用環境」の演題で発表し、本種は牧草地のような人工環境の多い繁殖環境では人為的影響により利用場所を変更し得ることを示しました。

午後は正富宏之氏を座長に迎え、百瀬邦和氏（山階鳥類研究所）に「越冬期のタンチョウの行動域と移動状況」と「タンチョウ空中調査の概要」の2演題を講演していただきました。最初の演題では厳冬期のタンチョウは塒を離れた後は付近の河川や湧水池などの自然採餌場に分散していることや就塒前に給餌場に集合することが示され、また2つ目では小型航空機による調査日程と産卵・孵化のタイミングとの関係等が発表されました。次の古賀の「タンチョウに関する今後の調査課題」では、現在も生息環境は悪化しているので、本種の生息場所確保のために好適な生息環境の条件を見出すとともに、人工育雛個体の野生化技術を確立する必要があると述べられまし

た。続く講演「ナベヅルの営巣環境とその保全」では、藤巻裕蔵氏がロシアで調査した本種の繁殖生態の概略を示すとともに、現在も森林伐採が行われている本種の繁殖地を自然保護区にして保護する必要があると提言しました。最後に、日高哲二氏（日本野鳥の会）が「東アジアに生息するツル類の渡りと渡りの中継地の環境」の演題で、人工衛星を使ったナベヅルやマナヅルの渡り経路の解明により中国での保護が進むことになったことや、今なお湿地の開発計画があることを発表しました。

以上の講演後、総合討論が行われ、ツル類のみならず湿原を含めた保護・研究活動の進め方について意見が交換されました。また、情報交換の場として、今回のような会合を続けて開催してほしいとのうれしい要望も出ました。

最後になりましたが、会場を提供いただいた環境庁、後援いただいた阿寒町教育委員会、並びに進行や片づけを手伝っていただいた青木則幸、佐々木雅修、佐羽尾加奈、百瀬ゆりあの各氏と参加者の皆様にお礼申し上げます。

（阿寒町教育委員会）

学術集会のお知らせ

イギリス鳥学会と自然保護委員会の合同会議「帰化鳥類」

4月7日～9日にイギリスのピーターバラのThe Great Northern Hotelでイギリス鳥学会と自然保護合同委員会の合同会議「帰化鳥類」（British Ornithologists' Union & Joint Nature Conservation Committee Conference "Feral and Introduced Birds"）が開催されます。論題にはアカオタテガモ、雑種、カナダガン、モニタリング、再移入、法律などが含まれています。

問い合わせ先：Graeme Green BOU C/O The Natural History Museum Tring Hertfordshire HP23 6AP. England.

お　知　ら　せ

【鳥類保護委員会】

去る10月8～10日に、上越教育大学において開催された本会の大会を機に、10月8日に鳥類保護委員会を開催し、本委員会の規定、活動方針などを次のように決めましたのでお知らせします。

1、本委員会の活動方針

1）諸外国の鳥類関連団体とわが国の関連団体との連携促進

鳥類保護委員会はIOC（国際鳥学会）を初めとする諸外国の鳥類に関する保護活動を展開している諸団体と我が国の鳥類保護関連諸団体との情報交換のパイプ役を果たすことにしました。

これまで我が国はICBP-J（国際鳥類保護連盟日本委員会）を核に鳥類関連の諸団体が結集していましたが、これが解散してBirdlife Internationalに組織替えしたことに伴い、現在は日本野鳥の会がLeader Organizationとして加盟しているに過ぎません。従って、WWF-J（世界自然保護基金日本委員会）やIWRB-J（国際水禽・湿地研究局日本委員会）といった国際団体を除いては、諸外国との直接的な情報交換の窓口が断ち切られた状態になっています。従って、本委員会はこれらの橋渡しの役割を果たしたいと考えています。

これまでの日本鳥学会会員の活動を見ていますと、個人的にあるいは組織的に海外の学会を初め各種のフォーラムやワークショップ等で活躍しています。そこで当面はこれらの人からの情報を会員に紹介する形で着手したいと考えています。具体的には当会員または会員からこのような活動をしている人を紹介して頂き、その人に情報を提供して貰ってこれを鳥学ニュースに掲載する形を取りたいと考えています。

2）鳥学に関する国内の調査・研究団体の活

動内容の把握・紹介

国内で鳥類に関する保護や調査・研究を進めている諸団体を把握し、その活動内容を広く紹介することを目的に、保護委員会企画として鳥学ニュースで特集号を組みたいと考えています。国内には国際的に活発に活動している団体を初め、国内的に細々と活動している団体まで各種のものが知られています。

本委員会としてこれらの諸団体の実態と活動内容を把握しておくことは、今後の保護活動を展開する上で有意義であること、これら諸団体相互の連携を図ることによって、更に一層発展的な活動が展開されることを期待して企画しました。

具体的方法としては、まず鳥学ニュースで諸団体に呼びかけ、原稿を募集し、集まった数、内容から紹介の程度（全てを掲載するか、必要事項をリストとして載せるかなど）を適宜検討したいと考えています。

3）鳥類に関する保護活動に対する支援

諸団体からの保護活動に関する催し、アピール等の後援、共催などの依頼に対する支援は今後とも継続します。但し、政治的色彩、営利目的、売名行為などを目的とするものに対しては支援しません。

なお、本委員会の守備範囲は、下記の委員会規約にもあるように、保護関係に限定することとしています。即ち、後援、共催などは必ずしも保護関係に限らないことによります。保護関連以外については、後援は常任評議員会に、共催については評議員会に諮ることとしています。

2、鳥類保護委員会規定の制定

鳥類保護委員会の規定を策定し、即日施行されました。本規定については日本鳥学会誌を参照下さい。なお、委員は必ずしも評議員である必要はありません。また、他の委員会との整合性を図るために、副委員長を設けました。

3、鳥類保護委員会の活動

保護委員会発足以来の活動内容を報告します。

1）1993年12月20日に開催された、第28回全国野生生物保護実績発表大会（主催：環境庁・日本鳥類保護連盟）の審査委員として、竹下信雄氏を派遣した。

2）1994年1月23日に栃木県小山市で開催された、第4回オオタカ保護シンポジウム（主催：オオタカ保護ネットワーク・日本野鳥の会栃木県支部）を後援した。

3）1994年3月18日に開かれた、平成6年度愛鳥週間野生生物保護功労者の審査委員として、当委員会委員である中村司氏を派遣した。

4）1994年6月25、26日に兵庫県豊岡市で開催された、「コウノトリ未来・国際会議」（主催：兵庫県・豊岡市）を後援した。

5）1994年10月28日に開催された、第29回全国野生生物保護実績発表大会（主催：環境庁・日本鳥類保護連盟）の書類審査委員として、竹下信雄氏を派遣した。

6）1994年12月12日に開催された、第29回全国野生生物保護実績発表大会（主催：環境庁・日本鳥類保護連盟）の審査委員として、当委員会委員の中村司氏を派遣した。

7）1994年12月12日に開催された愛鳥懇話会（主催：日本鳥類保護連盟）に、当委員会委員の中村司氏を派遣した。

8）1994年11月29日から12月5日に釧路市で開かれた、東アジア～オーストラリア湿地水鳥ワークショップ「主催：環境庁、オーストラリア自然保護庁、AWB、IWRB-J（国際水禽・湿地研究局日本委員会）、AWB（アジア湿地局）」に、鳥類保護委員の藤巻裕蔵氏、樋口広芳氏と阿部學の3人が出席した。

これに先立ち、パプアニューギニアの日本大使館員から個人的に、日本鳥学会長宛に同国代表の上記ワークショップへの出席旅費の負担依頼があった。この依頼文が保護委員会に回送されてきたのを受けて、阿部學が副会長を努めるIWRB-Jで受理し、結果的に、パプアニューギニア代表にかかる経費を全額負担して招待した。

4、原稿の募集

鳥類保護委員会企画の原稿を次の要領で

募集します。これらは鳥学ニュースに掲載したいと考えています。鳥類保護委員長までお送りください。

送付先：〒950-21
新潟市五十嵐二の町8050
新潟大学農学部野生動物学教室
TEL. 025－262－6623
FAX. 025－263－1659

1）鳥類関連団体名鑑

わが国で鳥類の保護や調査・研究活動を展開している団体の名簿を作成しますので、下記の項目を記載した原稿をお寄せください。

団体名、代表者、連絡先（住所、電話とファックス番号）、発足年月日、会員数、年間活動経費、活動目的と内容、その他とします。諸外国との連絡が容易なように団体名、連絡先、代表者などには英名を付して下さい。

鳥学ニュースが行き届かない団体で、これに該当する団体をご存じでしたら声をかけて下さい。

2）国際研究集会等の紹介原稿募集

国際会議、ワークショップ、フォーラム等国外で開催された集会に出席した方は、その内容を紹介する原稿をお寄せ下さい。会員外でこれに該当する方がおられましたら当委員会までご一報下さい。

（鳥類保護委員長　阿部學）

【編集委員会】

各年度の最終号に日本人の鳥学者の業績を海外に紹介する目的で、日本鳥学文献目録を掲載しています。しかし、編集委員会ですべての論文を網羅することは出来ず、紹介漏れが出てきます。そこで、出来るだけ完全な目録にするために、学会誌ならびに大学紀要・博物館報告などの各種研究機関の刊行物に発表された論文・総説・短報のうち、欧文論文あるいは和文論文で欧文の摘要論文を発表された会員は、英文著者名、発表年度、英文表題名、英文発表刊行物名、頁数、欧文論文（E）か欧文摘要つきの和文論文（J＋E）の区別を編集委員長宛にお知らせ下さい。報告のスタイルは各年度の最終号を御参照下さい。御協力をお願いします。

（編集委員長　斎藤隆史）

【選挙管理委員会】

○今年行われる会長、評議員選挙の、被選挙権の保持者は1995年3月31日の時点で1995年度分の会費を納入済の会員とします。

（選挙管理委員長　江崎保男）

【事務局】

○蒲谷鶴彦氏から鳥学基金へ100,000円の寄付を頂きました。紙面を借りて感謝します。

○前回の学会誌43巻2号に同封してありました振込用紙は1995年度会費用です。

会費は、普通会員　5,000円
維持会員　10,000円
学生会員　3,000円

です。よろしくおねがいします。

○今年は会長、評議員選挙の年です。会長が委嘱する選挙管理委員として、坂根隆治、江崎保男、和田岳の三氏が1994年10月8日の評議員会で承認されました。その後、阪神大震災にともなう事情で坂根氏が委員を辞退されましたので、樋口行雄氏が新たに会長の委嘱を受け常任評議員会でこのことが承認されました。なお、委員長には、江崎保男氏が選出されました。

鳥学ニュース　No.54
1995年2月1日　発行　（会員配布）
発行　日本鳥学会
〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部動物社会学研究室気付
TEL. 06-605-2607　FAX. 06-605-2522
発行人　山岸　哲　　印刷所　㈱丸二印刷
編集　江崎保男・西海　功